

眞実は誰か知るか
井上友一郎著

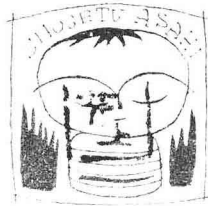
眞実は誰も知らない

井 上 友 一 郎

眞實は誰も知らない

定 價 250円

地方賣價 255円



昭和二十七年九月十日 印刷
昭和二十七年九月十五日 発行

発行所

株式
会社

小説朝日社

東京都千代田區神田小川町一ノ一〇
電話神田(25)二七七五・振替東京一八〇二七九

著者 井上友一郎

発行者 山田 靜 郎

印刷者 山口 梅 吉

印刷所 昌平印刷株式會社

東京都千代田區神田金澤町八番地

五　色　の　嵐

流行歌手の伊豆伍郎は、その晩、道頓堀のキャバレー「寶玉」の控へ室に入つていくと、やや神経質な表情で支配人を呼んでほしいと言つた。

ボーイが心得て、廊下へ去ると、伊豆は早速、薄茶の澁い背廣を脱いで、演奏用の派手なチェックの背廣に着換へながら、時々、「ちえッ」と舌打ちした。

（また今夜も、だらしない社用族がうようよしてやがる……）

伊豆が殊更、小耳を立てるまでもなく、廊下を隔てた客席のはうに當つて、バンドの演奏の音色に混り、パーン、パーンと盛んにコメントを發射する響きが聴える。

お客が酔つて、戯れてゐるわけだ。

それはいいが、ゆふべ伊豆が、この「寶玉」のステージに立ち、お得意のハンガリー民謡から編曲した「ジブシイの唄」をうたつてゐると、ひどく酔つぱらつた五十がらみのお客が、白いドレスのダンスアに支へられて、ふらふらと眼前に歩み寄るとみるや、いきなり、パーン、とコメントをぶつ放したのである。

小さな紙の筒口から、さあーッと五色のテープが飛び出し、それが伊豆の肩先へ絡みついた。

それで伊豆は唄を止めて、ちよつと考へ込んでから、つかつかとマイクの前を離れ、黙つて控へ室へ引きあげてしまつたのである。もちろん支配人の懇請で、伊豆は再びマイクの前にひつぱり出され、豫定の曲目は一通りうたひ終つたのだが、何と言つても、亂痴氣騒ぎのクリスマス第一夜のことである。事務所のはうでも、「伊豆・伍郎氏出演中は何卒コメント發射御遠慮下さい」とマイクでも挨拶し、客席の一隅にも、貼紙を出してくれたがそんなものを忠實に守ってくれるお客ばかりではない。

伊豆が再び「ジブシイの唄」をうたつてゐると、あつちでも、こつちでも、パーン、パーンとコメントの發射である。しかし、どうにか、無禮な客が、伊豆にあくどく戯れたりはしなかつたので、伊豆は内心、いらいらしながら、最後までうたひ切つた。

今夜は、そんなゆふべにつづく第二日目である。そこで、伊豆は、出演に先立つて、一つ、大いに支配人の注意を喚起しようと思ひ立つた次第であつた。

「やア、どうも御苦勞さんです……」

伊豆がちやんと服装を改めて、タバコを一ふくやつてゐると、大柄で太つちよの支配人が入つてきた。

「お呼び立てして失禮ですが」

と、伊豆は軽く會釈して、

「如何です、今夜の様子は？」

「お蔭さんで、えらい大入りで欣びます。何と言つても伊豆さんの出演は、えらい看板になつとりますわ。一つ大いに張り切つて、やつて頂きたいと思ふとります」

「ときに、マネエジャア」

伊豆伍郎の口邊に、やや皮肉な微笑が浮びあがつた。

「實は、ちよつとわがままなことを言はせてもらひますが、今夜、マイクに立つまでは一つ、折入つてお願いがあるんですよ」

「ははあ、それは？」

「いや、他のことでもないんですがね、——マネエジャアも御存じのやうに、ゆふべの例のコメットのことなんです」

「うむ、うむ」

「それで、一つ、今夜、あなたにお約束ねがひたいことがあるんです」

「どんな風な？」

およそ伊豆が何を言はんとしてゐるか、もう支配人の胸うちでも見當は付いてゐる。しかし、彼は、わざと素ッとぼけて、自分のほうから何も言はない。

伊豆は、ほそおもての白い顔を、上氣させて、

「問題は、あのコメットです。あいつは全く困りもので、演奏中あれをパンパンやられますと、わたしの気分は非常に亂れるんです。うたへなくなつちやうんです。そこで、マネエジャア。今夜お願いですが、もし今夜、出演中に、あいつをあぐどく打つお客ができましたら、わたしはそのまま曲をつづけるわけにいきません。すぐ止めて、失禮してもらひます。——よろしいですか。そいつを一つ、前以てお約束ねがつておきたいんですよ」

「いや、何事や思ふたらそのことですか」

老獺なマネエジャアは、事もなげに笑ひながら、ふと伊豆の鼻ッ先で、金指輪の光つた手のひらを二三度、振つた。

「あッはッはッはッ。……大丈夫です。それは、こつちで極力注意しますから、どうか氣になさらずでやつて下さい。なアに、今夜は大丈夫ですよ」

「さうですか。とにかく、それぢやア、コメントは絶対に打たない、といふことに願ひますよ」

そこへ、事務所のボーイが顔を出して、そろそろ出演の時間が迫つたと知らせにきた。

伊豆はチラと腕時計に眼を落し、手にしたタバコを傍の灰皿でもみ消した。

廣いホールも、いまや人いきれと脂粉の香で、おんおんしてゐる。

バンドの演奏にも熱が入り、マイクの前では、ダンサアのなかから選ばれたこのキャバレの素人歌手が、まるで金切り聲を張りあげんばかりの勢ひで、「ボエマ・タンゴ」をうたつてゐる。

お客は、大部分酔つぱらつてをり、めいめい入口でもらつてきた紙の帽子をちよこんと被り、なかには、銀色の假面を付けたままステップを踏む男もある。

呼び物の流行歌手伊豆伍郎の出演する時間も迫つた。

そのとき、入口に近い、廊下から、どやどやと人つてきた女連れの客があつた。

ボーイは早速、先頭に立つて、人々を押し分けながら、いちばん奥のテーブル席へ案内したが、この若い女を混へた客たちは、すぐさまハイボールを注文し、ろくに飲み盡さないうちに、フロアーに降りて、踊り始めた。よく見ると、男二人に、女二人である。しかし、そのステップの踏み方では、すでにどこかで、かなり飲んできたらしい様子である。

彼等の姿は、もとより大海のなかのケシ粒みたいに、ゴった返す踊り客の波に没してしまひ、特に誰も注意する者もなかつたけれど、しかし、係りのボーイだけが、柱に凭れて、こんなことを心のなかで呟いてゐる。

（なんて又、若い女やらう。あの女は二人とも十六七、——どつちにしても、まだ女學生らしいけど、相當なもんや……）

一しきり、フロアーの人波は、銀色のミラア・ボールの光りの下で美しく蠢めいてゐたけれど、程なくタンゴバンドが終つた。

そして事務所の支配人が、堂々たる體軀を運んで、マイクの前で何事か尤もらしい口上を述べた。

急激のやうな拍手の響き！

「伊豆や……」

「伊豆伍郎がうたひよるで……」

みんな一せいに手を叩き、ヒューッと鋭い口笛を吹く男もある。

伊豆伍郎の白い、ほつそりした顔が見えた。又、拍手である。そして、交代したスイング・バンドが、ゆるやかに、ワルツを奏し始めた。曲は、「アロハ・オエ」である。お客はゆつくり、それで踊つた。

一曲終つた。

それから次々と三曲ばかりすんだあと、最後に、伊豆伍郎お得意の「ジブシイの唄」が始まる。

林檎の花咲けど

君はかへらずや

ちぎりし言葉も

夢か ああ かの日……

「それ、ウララちゃん、始まつてまッせ！」

と、そのとき一たん引きあげたテエブル席で、ちよつと肘で小脇を突き合つて笑つたのは、先刻の若いお客である。

ウララと呼ばれた海老茶のセエタアの女は、「うん」と深く頷いて、

「よっちゃん、早う踊つて……」

と、傍の若者の手首を掴んで、有無を言はず混んだフロアーに降りていく。

ウララは、ことし十七歳、まだ神戸の女子高校生だが、ダンスはかなり得意である。それに、ジャズ・ソングにも造詣が深い。今しがたもう一人の女友達が、「ウララちゃん、始まつてまッせ」と言つたのも、實は特別な意味があつて、かねてウララが流行歌手の伊豆伍郎のファンだつたからである。ウララは、ラジオやレコードで特に前から伊豆伍郎には親しんでゐた。

星はかがやけど

君はかへらずや……

ウララが相手のよっちゃんを抱き合つて、ずつとフロアーの奥のはうへ踊つて去つてしまつて間もなくである。ちやうどマイクの前の伊豆伍郎が、第二曲目の中程までうたひ進んできた際だ。突如、例のコメントが、パーンと小氣味いい響きを立ててマイクのすぐ傍で打ち出された。

「あッ」

と一瞬伊豆がそりかへる胸もとに、五色のテープがさあッと絡んでだらりと床の上に垂れさがる。バンドの演奏はつづいてゐるが、伊豆の口は、きゅッと固く結ばれた。うたつてゐない。

伊豆は無言で、おいッとそのコメントを打ち出した踊り客の一角を睨み付けたが、それはほんの五秒か十秒くらゐの間だ。ふと伊豆は神経質な眼をしばたいて、くるりと身をひるがへすとみるや、傍で事務員たちの取りなすのも耳に入らず、さッさッと、このステージを引きあげてしまつたのである。

「ニュースやニュースや……」

と眩きながら、間もなくウララと踊つてゐたよっちゃんが、頭を掻きながらフロアーから一人で引きあげてきた。

「どないしたん？」

こつちで坐つてゐた二人が訊くと、よっちゃんは眼を圓く、くるくる廻して、

「言ふたらうか——驚く勿れや。いまコメントを打つた客は誰やと思ふ？」

「コメント打つた客？」

「うん、さうや。——實は、あれ、ウララちゃんやで。ウララちゃんが打ちよつたん」
と、びつくりしたやうに異口同音で二人が叫ぶ。

「何でや知らん。しかし、ウララちゃんも無茶しよる、ぼくと組んで踊つてゐて、ずつとマイクの近くまで寄つたとき、いきなり、隠して持つてたコメットを、ぼーんと伊豆伍郎めがけて打ちよつたんや——」

「へーえ……」

三人で顔見合してゐるところへ、當のウララが、かすかな笑ひを噛み殺すやうな面持ちで、フロアーを引きあげてきたのである。

伊豆伍郎は昂奮してゐた。

彼は背後に追ひすがるボーイや事務員たちを無視して、とつとつと控へ室へ飛び込むと、すぐさま出演用の派手な背廣を脱ぎ始めた。

「もう出られない。うたへないよ。ぼくは歸る……」

そして窓のガラス越しに、寒々した道頓堀川の水面をみつめながら。

「すまないが、ちよつとマネージャアにさう言つといてくれないか。今夜は、お約束だから、どうしてもうたへないと……」

言ひ終らぬうち、太つた支配人が、ふうふう言ひながら入つてきた。

どこかで一杯ひつかけてゐたらしく、眼のふちがテカテカしてゐる。

「やア、伊豆さん。困りましたな……」

伊豆はチラと、支配人を一瞥して、無言の苦笑を投げ付けた。

支配人は、伊豆の傍に歩み寄り、白いワイシャツの肩を抱へ込むやうにして、叩きながら、

「伊豆さん。何とも恐縮ですけれど、こらへて下さい。どうか一つ、我慢して、あとを續けて下さい。お客がワアワア騒いで、あんなに出てくれ言ふとりますがな」

「いや、マネエジャア、あれほど念を押してお願ひしとつたことでせう」

「判つとります。まことに、すまん。申譯ありませんわ。しかし、伊豆さん。どうぞ一つ、今夜はわしの顔を立てて下さいよ。このままあんに引っこまれてしもたら、わたしの立場がありませんわ……」

「いや、その點、あなたにはお氣の毒ですけれど、わたし、あれで本當にうたへないんです。わたしも藝を賣る商賣ですから、本當にうたへないものを、いい加減にごまかしちゃうといふことは出来やしない……」

「判つとります。そりや、ほんまや。その通りや。しかし、伊豆さん。もう大丈夫です。もうあんなことは絶對にありませんわ。而も、お客は、いきなり、伊豆さんが引っこんでしもたから、みんなびつくりして、茫とします。要するに、あんたの唄を一分間でも永く聞きたいといふことや。そこが、あんたの人氣ですわ。どうぞ一つ、この際はわたしに免じて、もう一べん出て下さい。たのみますよ……」

伊豆は歸りの背廣に着換へてしまひ、窓際の椅子に腰かけたまま、頭として聞き入れなかつた。

「いや、わたしはうたへないです。——お手數ですが、堂島の難波ホテルに電話をかけて、わたしの秘書を呼ん

で下さい。話は、それにさせますから、とにかくわたしは、このまま失禮させてもらひます」
ガチャン……と、そのときドアが荒々しくひらかれて、三十くらゐのハンチングをかぶつた青年が入つてきた。

「あんた、誰方や？」

と、支配人が振り向くと、青年はさつと内ポケットから名刺を掴み出して、

「ぼく、關西新報の社會部の者ですが、ちよつと、伊豆さんにお訊きしたいことがあるんです……」

「あッ、ちよつとちよつとー」

支配人はびつくりして、その記者の前に立ちはだかり、

「わたし、この支配人の林です。どうぞ、ちよつと、こちらへ。とにかく、ちよつと……」

そして慌てて廊下のそとへ押しやりながら、すぐ隣の事務室へ連れて入つた。

新聞記者はニヤニヤ笑ひで林支配人を見据ゑながら、

「一體、どうしたんです？ ぼく、今夜はお客で踊つとつたんだが、この騒ぎでせう。一體、伊豆伍郎は、今夜も出ないんですか、それとも出るんですか」

「出ます。必らず出してみせます。しかし、實は弱つとるんです……」

支配人は用意のウイスキー饅の栓をあけて、

「まァ、一つ」

と、埃ッぽい卓上のグラスにそれを注いで、進めてから、

「伊豆伍郎は必らずもう一度出しますが、とにかく御承知のやうに、あのコメット問題で、えらいごててゐるんですわ。——そこで、一つ、その縁で、このキャバレ寶玉で一騒ぎがあつたことを、新聞に書いて頂けませんか—

「しかし、支配人。問題はコメット事件だけですわ。何か他に原因はないんですか。實はちよつとお客の一部でも噂してゐるやうだが、かねて伊豆伍郎は、このクリスマス三日間出演の契約の件で、若干、お宅には不満だつたらしいさうだが……」

「いや、滅相な。そんなことは絶対にありませんな。そりやデマですわ。しかし、要するに、問題は、お客の放つた一發のコメットで、あの藝術家肌の伊豆伍郎が、良心的な考へで、どうしてもうたへない、と……」

ドアが開いて、ボーイが面喰つたやうな顔を出した。

「マネエジャア。伊豆さんが歸りやはりまッせ」

「あッ、そらいかん」

支配人はびよんと椅子から跳びあがり、卓上のウイスキーを續ごと記者の前に押しやつて、

「どうぞ、御ゆつくり、これをどうぞ。ちよつと失禮します。すぐ参ります……」

そして、靴を踏み鳴らして出ていつた。

伊豆伍郎の立ち去つたステージでは、とにかくバンドの演奏がつづけられ、多くのお客も、ぶつくさ言ひなが

ら飲んだり踊つたりしてゐたが、あつちこつちのテーブルには、相當うるさ型のお客もあつて、

「伊豆はどないした？」

「もう出さんのか」

「看板に偽はりあり、といふことになるやないか……」

と、次々とボーイが席に呼び付けられて、すこぶる尊大な態度で油をしぼられる始末である。

そこで、人氣大切と考へたキャバレ側でも、支配人以下幹部總出で、當の伊豆佐郎を説得し、やうやく一つの條件つきで、再度、ステージに立つことに話がきまつた。

「お客さまに申し上げます。ちよつと御挨拶いたします……」

林支配人がバンドを留めて、マイクの前に突ッ立つて、場内に陳謝の意を表明してから、最後に、かういふことを付け加へた。

「そこで、まことに勝手なお願いがございますが、唯今、氣分を一新し、再びマイクの前に立つ伊豆佐郎氏のため、演奏中、甚だ申しかねますが、コメッ●だけは我慢してやらうと、お約束ねがひたいんですが、如何なものでございませうか……」

「オーケーや」

「わかつたぞ」

「早う出せ出せ」

客は方々で、直ちに應じた。

拍手が、ざあーッと一わたり、場内に響くなかを、やがて伊豆伍郎が、唇をきゅッと結んであらはれた。

「何とか言へ……」

「早う、やつてや」

「ゴロちゃん！」

と、場内の隅々から愛嬌のある彌次が飛んだが、それも忽ち鎮まつて、伊豆は、静かにステージの上から會釋してから、バンドの演奏を待ちかまへた。

再び「ジプシイの唄」が奏でられる……。

「フロアーはもとのやうに人々でこつた返し、ミラア・ボールや五色の照明が一段ときらびやかに光りだした。

林檎の花咲けど

君はかへらずや

ちぎりし言葉も

夢か ああ かの日……

伊豆伍郎の蒼白な兩頬が、うすく紅潮してきたやうだ。

人々は、もう先刻の事件を忘れ果てて、たのしげにパアトナアの肩を擁して、ゆるやかにステップを踏む。今日ばかりは、純白のイヴニング・ドレスを一せいに着飾つたダンサーたちも、この人氣歌手の美しい肉聲に惚れ惚れして、お客へのサービスにも殊の外、まめまめしい。

奥の事務室でウイスキーをあふつてきた新聞記者は、馴染のダンサーの腰を抱きしめて踊りながら、

「こんなもの事件のうちに入らん。圍ひ物にもならへんわ……」

と、呟いてゐる。

曲は、次第に高潮してきた。

すると、そのとき、又してもステージの間近かに當つて、パーンと……一發、コメットが發射された。

「あッ」

と、思はず大勢の人間が振り向くと、伊豆はびたりと唄を止めて、自分の肩に絡み付いた赤い紙テープを握りしめた。

伊豆の顔色は直蒼になつてしまつた。

「ど、ど、どうして……」

と、口のなかで吃りながら、彼は無意識にそのテープのつながつてゐるフロアの一點を見た。

ウララが、そこに十六七とも思はれぬ不敵な眼付きで、おいッ和伊豆伍郎を見つめてゐる。

伊豆の瞳がつめたく光つて、ウララのそれを見返した。

心　　臓　　娘